

若者の

きっと、社会は変えられる。 政治参加のチカラ × 労働組合のチカラ

芳野友子

連合会長

たかまつなな

笑下村塾代表取締役・社会起業家

春田雄一

連合総合運動推進局長【進行】

「連合および労働組合のイメージ調査2026」によれば、連合のイメージは、全体では「影響力のある」が最多の一方、「保守的」「堅実」「真面目」も上位で20～30代では特に目立つ。「労働組合＝男性中心の組織」というイメージも根強く、女性や若者の参加をどう進めるかは、依然として大きな課題と言えそうだ。そんな中で「社会を変えたいと思っている若者は確実にいる。社会は変えられると信じて行動する人を増やしていきたい」と、10年前に笑下村塾を設立し、若者の社会参加の支援・推進の仕組みづくりに取り組んできたのが、たかまつななさんだ。これまで11万人の子どもたちに主権者教育の出張授業を届け、最近では「高校生リバースメンター」にも力を入れている。女性や若者の思いをどう受け止め、社会を変える力につなげていけばいいのか。芳野会長とたかまつななさんが語り合った。

社会を変えたい！
活動の原点とは？

お笑いを通して社会問題を発信

春田 たかまつさんは、2016年に笑下村塾を設立し、若者の社会参加の仕組みづくりに取り組まれてきました。その活動の原点とは？

たかまつ 小学校4年生の時、アルピニスト野口健さん主宰の「環境学校」に参加し、青木ヶ原樹海に廃バスや医療系ゴミが大量に不法投棄されているのを見てショックを受けました。健さんが「大人は見えて見ぬふりをしている。君たち子どもが伝えてほしい」とおっしゃって、「じゃあ自分が伝えよう」と。読売新聞の子ども記者として環境問題の記事を書いたり、「高校生平和大使」として国連でスピーチしたりしましたが、「真面目に語っても輪が広がっていかない」というもどかしさが募るように。そこで思いついたのが「お笑い」です。「お笑いを通してなら社会課題をもっと知ってもらえるかもしれない」と、大学合格と同時に「お笑いの養成所へ。大学2年の時「お嬢様ネタ」でデビューしました。

芳野 笑いのツボが絶妙でした。「高校生平和大使」もされていたんですね。本格的に「お笑いを通して社会問題を発信する」活動を始めたのは？

たかまつ 2016年、公職選挙法が70年ぶりに改正され、18歳選挙権が導入された時です。私は大学院生でしたが、このタイミングを逃してはいけないと、若者の政治参加（主権者教育）を専門とする株式会社笑下村塾を設立。会社名には「お笑いで世直しをしたい」という思いを込めました。18歳選挙権が導入されて、私は初めて政治の場で若者にマイクが向けられた感じがしたんです。でも、若者が政治を考える教材はほとんどないし、学校現場での主権者教育も進んでいない。それで、全国の学校を回って出張授業を始めたんです。

女性の課題は「わがまま扱い」

春田 芳野会長の活動の原点は？

芳野 私は、20代から労働組合活動に関わってきましたが、当時、執行委員会は、ミドル世代の男性ばかり。「女性の幸せは、良き妻、良き母になること」という性別役割分担意識が強く、女性の課題を訴えても「それって女性のわがままだよ」と理解してもらえない。労



たかまつ なな

笑下村塾代表取締役・社会起業家

1993年生まれ。2016年、「18歳選挙権」導入を機に株式会社笑下村塾を設立。「社会は変えられる」と信じて行動する若者を増やすため、主権者教育の出張授業や、若者の声を政策に反映する「高校生リバースメンター」を全国で展開。対話を重視した政治番組「たかまつななのSocial Action！」（登録者24万人）を運営し、社会課題の解決を考える場をつくっている。朝まで生テレビ!、ABEMA Prime などにも出演。

笑下村塾 マンスリーサポーター大募集中!
<https://www.shoukasonjuku.com>

働組合とは様々な人たちが抱えている課題を受け止めて改善していく組織なのだから、もともと風通し良く女性の視点をに入れていくべきだと思っていました。

意思決定の場への女性の参画が必要だと痛感したのは、年金の第3号被保険者制度をめぐる議論でした。1990年代初め、共働き世帯の数が片働き世帯を上回ったタイミングで、連合の地方組織（地方連合会）の女性委員会では「第3号は廃止し、ライフスタイルに中立的な制度にすべき」という意見が多数を占めました。それを連合本部の政策・制度要求に反映させたいと思ったのですが、多数を占める男性執行委員の抵抗にあい、断念せざるを得ませんでした。意思決定の場に女性

が少ないというのは、こういうことなのかと身に染みました。

その頃、国際会議では「ジェンダー平等」「ジェンダー主流化」というアプローチが提起されました。私は、労働運動においても、女性の参画を進め、多様な人々が関わっていくことが課題だと思っていました。だから、2021年に連合会長に就任した時、「連合運動のすべてにジェンダーの視点を入れていく」と宣言し、「ジェンダー平等参画推進計画」を進めてきたんです。

たかまつ 1990年代にすでに第3号被保険者制度について議論されていたんですね。私は2023年に社会保障審議会年金部会の委員になり、「第3

たかまつ 子どもの貧困、性暴力、気候変動、ジェンダー平等など社会課題に関心がある子は確実に増えていきます。これは「探究の授業」の成果であると同時に、この10年で社会課題が身近になっていくからでもあると思います。ただ「自分の力で社会を変えられる」と思う子の割合は、依然として他の先進国より低い。

最近心配なのは、社会運動が「政治的」だと見なされると徹底的に叩かれるという風潮です。実際に疲弊して活動から遠ざかる若者も少なくありません。

芳野 連合の「多様な社会運動と労働組合に関する意識調査2021」では、若い世代が社会運動や労働組合に高い参加意欲を持ちながらも、そのルート



芳野 友子

連合会長

につながつていないことが明らかになり、「Z世代が考える社会を良くするための社会運動調査2022」では、約9割が「社会課題に関心がある」と回答していました。たかまつさんが取り組んでいる「若者の社会参加の支援・推進の仕組みづくり」は連合としても重要な課題だと考えています。

たかまつ 若者の社会参加のツールとして、今力を入れているのが「高校生リバースメンター」です。高校生が自治体首長の相談役に就任し政策提言する。ただ意見を言うだけではなく、それを事業化して、社会を変えるところまでつなげていく。

実施した自治体では実際に社会が変わってきているんです。群馬県では、不登校経験者の声を受け、「不登校」を「UnPath（ユニパス）／一人ひとりの生きる道」と言い換え、LGBTQ当事者の声から男女別の校則を見直し、教員研修も実施。子宮頸がんワクチンの接種拡大を進めたいという女子生徒の声を聞いてショッピングモールに接種会場も開設。子どもたちの身近な疑問や困りごとから社会を変える提言が生まれる。それが政策として実現すると、参加者は「社会を変える人間であり続けたい」と思ってくれるよう

号は、専業主婦を前提とした制度設計のため、今の時代に合っていない。女性の活躍を阻害している。条件つきで廃止し、第2号の適用拡大をはかるべきだ」と意見表明しました。これに対しては賛否両論ありましたが、連合が廃止を求める方針を決定し、芳野会長が社会的に発信してくれて心強かったです。

「別姓未婚」という社会問題

春田 たかまつさんは、昨年、ご自身の事実婚を公表され、選択的夫婦別氏制度が必要だということも訴えていますね。

たかまつ お互い苗字を変えたくなかった。すごく悩んで事実婚を選択し、「選択的夫婦別姓はじめ、みんながいろんな選択ができる社会を望みます」と書いたたら、Xの表示回数が9000万回。驚きました。

事実婚を公表したいちゃんの理由は、同姓しか選べない現行制度に困っている人がいることを分かってほしかったからです。私たちの世代では、相手に苗字を変えることを強制したくないから、法律婚をあきらめている人が少なくない。

でも、政治家と話をすると、選択的

になるんです。

芳野 リバースメンター、いいですね。今、地方の若い女性が大都市圏に流れていることが地方の衰退につながると危惧されていますが、地元を離れる理由を聞いてみると、やりたい仕事がない、妻・嫁・娘の役割を押し付けられると…。

先日、連合寄付講座でジェンダー平等をテーマに話をしたのですが、終了後、女子学生が来て「自分の家は男性から先に料理を出す。女が起業なんて許されない」と。21世紀生まれの世代でも、そんな生きづらさを抱えているのだと驚き、職場のなかだけでなく地域や家庭にも目を向けていかないと社会は変わらないと痛感したところです。

たかまつ 『朝まで生テレビ』（BS朝日）で地方女子問題の背景にあるアンコンシヤス・バイアスの話をしたら、そこで話を広げてくださる方がいなくて、別の話題へ移ってしまいました。言論の場にも、若い世代、特に若い女性は少ない。先日、女性の社会起業家が全国から集まるプログラムに参加したんですが、地方都市では「女性だと舐められるから、男性の役員を雇った」と。そんな実態がまだ日本中にはたくさんある。

夫婦別姓はイデオロギーの問題だと考えている人がけっこういる。「誰も困ってないでしょ」と。そうじゃないんです。私を含めてリアルに選択的夫婦別姓を待ち望んでいる人がいて、別姓待ちの待機者は58万人にのぼるとの推計もある。これは「別姓未婚」という社会問題だと思っています。

芳野 連合は、1995年から選択的夫婦別氏制度を政策要求に掲げてきました。若い世代の皆さんに対して、いまだ実現できていないことを申し訳なく思います。

若者・女性の意識はどう変わった？

不安や違和感に耳を傾けるリバースメンター

春田 笑下村塾を始めて10年、若い人の意識や価値観は変わりましたか。



春田 雄一

連合総合運動推進局長

芳野 連合にも女性起業家の方からの相談が寄せられています。政府の「女性版骨太の方針2026」も「女性が活躍でき、暮らしやすい地域づくり」を課題としています。そのためには地域の意思決定の場に女性・若者を参画させることが決定的に重要なのだと改めて思います。

「伝わらない」を「伝わる」に変えるには？

春田 たかまつさんの労働組合や連合に対するイメージは？

たかまつ 私自身は、人権やジェンダー平等の取り組みについて、連合と連携できることがたくさんあると思っていますが、一般には「大企業で働く人の労働環境を守る組織」だと見られているのではないかと思います。スウェーデンでは、気候変動や若者の政治参加などの課題について、労働組合が若者団体と手を取り合って行動しています。日本でも、もともと社会課題の解決に向けた連携ができれば、若者や女性のイメージも変わるのではないでしょう。

芳野 日本は企業別労働組合がベースなので、連合の構成組織も産業政策を



優先する傾向があり、それが内向きだと映る。でも、なぜナショナルセンタ―連合が結成されたのかを考えると、企業の枠を超えて、すべての働く者・生活者の政策を実現するためであったはずなんです。そのことを改めて発信していないといけないですね。

心理的安全性が担保された 温かい空間を

春田 SNSによる発信は、どう活用すべきでしょう。

たかまつ 10年前は、SNSは社会を良くするツールであり、私も助けられました。しかし今、特にX（旧Twitter）は「息をしているだけで炎上する」空間であり、マイノリティに

対する排外的な主

張も充満。子どもたちもSNSの影響をかなり受けていると感じています。連合がSNSの発信を活用するなら、1人ではなく20人ぐらいがそれぞれアカウントを持ち、チームで連帯してお互いを

守って発信するぐらいやらないと厳しいと思います。発信力が高まっても、誰かを傷つけることになったら意味がない。Xからは撤退し、心理的安全性が担保された温かい世界観をつくっていくことをおすすめします。

春田 タイムリーな情報発信も課題です。

たかまつ 大事なのは、スピードより中身だと最近感じます。「あの政策が実現したのは、連合の働きかけがあったから」だと分かれば、連合への理解や共感が広がる。実際にそういう政策はすでにたくさんあるのではないのでしょうか。政治の混乱が続いている中で、連合が「おかしいことはおかしい」と言ってくれる存在になれば、注目されるはずです。

春田 もし、たかまつさんが連合の広報担当だったら、何から始めますか？

たかまつ 出張授業で学校を回りまくる！と思いますね。出張授業って、コスパが悪く見えますが、50分なり90分、対面で話を聴いてもらえる。ネット動画は見ても、1、2分。出張授業で大事なものは、その場で子どもたちの思いを聴くこと。それをもとに政策要求をまとめ、連合と連携する議員にアドボカシーしていけば、連合はちゃんと自

分の話を聴いてくれると思うようになります。

芳野 連合は、2005年から全国の大学で寄付講座を行っています。学生の話聴く機会はあまり多く設けてきませんでした。コミュニケーションが一方的だったかもしれません。

たかまつ 寄付講座、ぜひ大学だけでなく小中高にも広げてほしいです。大阪の西成高校では、20年ほど前に「反貧困学習」を始めました。当時は授業も成り立たない教育困難校だったので、家庭訪問をする生徒がヤングケアラーだったり、保護者が失職して生徒がアルバイトをしていたりという実態が見えてきた。そこで非正規雇用問題やひとり親家庭の問題を考える授業を行い、労災保険など、働く人を守る法律や制度の仕組みを教えてきました。労働問題は、生徒たちにとって日々のくらしと切り離せないテーマだったんです。

芳野 連合は、学生向けの『働くみんなにスターターBOOK』や小学生向けのすごろく、「ワークルール検定」など、労働教育の教材づくりに力を入れてきたんですが、もっと活用できる方法を考えますね。

たかまつ まずは「連合会長のリバー

スマンター」、やってみませんか。最初はやっぱり手探りなので、「高校生の意見なんて」と大人もそれを「評価する」ような空気があったのですが、やってみると若者の本質的な問いに大人が突き動かされていく。それが社会を変える力になっている。

芳野 未来志向のリバースマンター、ぜひやってみたいです。

春田 最後に読者にメッセージを。

たかまつ 連合組合員の皆さんが思っている以上に、連合の社会的役割は大きいと実感します。今、ジェンダー平等や多様性推進、人権、働き方改革などに逆行するような動きがありますが、そんな中で連合は「最後の砦」というべき存在。

今、更新されていない「社会のバグ」のような問題がたくさんあります。連合には、そこに目を向けて、社会にとって必要な政策を実現してほしい。若者や女性の社会参加を進め、一緒に社会を良くしていきます。

芳野 労働組合の原点に返って広く組合員の声を聴き、さらに組織の外にいる人たちとも対話を重ねながら、課題ごとに政策実現の道を探っていきたいと思います。

春田 ありがとうございます。